

25th Anniversary! アイキャンは25周年を迎えました。



2018年11月～2019年4月（2018年度後期）を振り返って

1994年4月に設立されたアイキャン（当時名称：アジア日本相互交流センター、通称名：アイキャン）は、今年で設立25年目となりました。創業から20年続いた企業が廃業していない可能性（生存率）は1割前後と言われることもある中、非営利の団体が、25年間も運営を継続することができたことは、偏に多くの協力者の皆さま、事業地の皆さま、子どもたち、一人ひとりのおかげです。心から感謝いたします。

フィリピンのスラムや路上の子どもたちの過酷な惨状に触れ、「この子どもたち」に「できること（アイキャン）」を行っていかうと、活動母体もなく、資金もなく、経験もなく、増して信用もない、文字通りゼロからのスタートでした。「この子どもたち」への活動は、フィリピン各地に広まり、2015年からは、中東やアフリカに活動を拡大することもできました。この25年を振り返り、私は3つのことを強く感じています。1つ目は、社会の現状に違和感を持ったとき、一人でも行動することの大切さです。最初の一人が行動していなければ、今のアイキャンはありません。2つ目は、「できることを癖にする」ことです。一見難しそうなことでも、「どうすればできるか」を常に考え行動することで、いつか実現することができ、それが自信となって、更に大きな課題に対しても、諦めず行動する勇気をもたらします。2005年にイエメンの紛争が激化し、多くの子どもたちが食糧不足で苦しむ中、日本人は入国もできない、イエメン国内にネットワークもなかった状況で、アイキャンが、諦めるのではなく、「どうすればできるか」だけを考え、結果、現在のように食糧提供ができるようになったことも、これまでのフィリピンで「できることを『癖』」にしてきた結果だと思えます。最後の3つ目は、志を共有できる仲間とともに行動することの重要性です。アイキャンの経験上、紛争地の危険地域にある学校にも、何日も歩いて到達できる山奥の先住民の村にも、そこで状況を変えようと必死に活動している人々が、子どもたちが必ずいます。日本にも自身の生活が大変にも関わらず、子どもたちの現状を変えようとご寄付やボランティアをしてくださる人々がいます。国を超え、文化を超え、志をともにする仲間が力をあわせるときに始めて、それは社会を動かす大きな力となります。この3つ学びは、今後、時代が変化する中で、アイキャンにいかなる変化があろうとも、活かされるものだと思っています。

さて、今期、マニラにある児童養護施設「路上の子どもの家」の2階の増築が無事終了し、30名以上の身寄りのない路上の子どもたちが継続的に生活できる環境を整えることができました。また、フィリピンミンダナオやジブチでは、ユニセフや UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）等の国連との連携の事業も行われています。裏ページに寄付募集について記載をさせていただいておりますので、ぜひご協力をお願いさせていただきます。私たちが信じて預けて下さったご寄付は、必ず困難な立場に置かれている人々の生活を向上させ、社会を変えます。いつもアイキャンの活動を応援していただき、心より感謝申し上げます。



ICAN 事務局長
井川 定一

特集 1：フィリピンマニラ近郊で路上の子どもの保護を推進するマニラ事務所福田

2019年3月に2階部分の増築が完了した児童養護施設「子どもの家」とマニラ近郊で生活する路上の子どもたちについて、街頭募金のボランティアに参加いただいている村田結子さんが、マニラ事務所の福田浩之にインタビューをしました。



アイキャン
マニラ事務所
福田 浩之

村田さん：フィリピンで児童養護施設「子どもの家」が完成したと伺いましたが、まずは、路上の子どもの現状について教えてください。

福田：フィリピン全土には25万人以上の路上の子どもたちが存在すると言われています。それはフィリピンの子どもの人口の約20人に1人にも相当します。

村田さん：そんなにいるんですね。

福田：はい、一般的に「路上の子ども」と言う場合、親も家もなく路上で生活する子ども、家族みんなで路上で生活している家庭の子ども、家はあるけれども路上で働いている子どもの3つのパターンがあるのですが、最も困難な状況に置かれているのが、最初の子どもたちです。この子どもたちに必要なことは、愛情が溢れ、危険から身を守る適切な住まいや衛生環境、教育等なのですが、政府やいくつかの現地NGOが児童養護施設を運営しているものの、常に満員の状況が続いていました。そこで、アイキャン自身で児童養護施設を建設し、運営することになりました。今回の2階部分の完成により、約30名ほどの身寄りのない子どもたちを受け入れることができます。



村田さん：他の施設が常に入居待ちならば、確かに施設は1軒でも、1部屋でも多い方がいいですね。アイキャンの子どもたちの家に入所する子どもは、どのような

基準で決まるのでしょうか。

福田：いくつか基準があるのですが、最も大切なことは、「子どもの家が最後の選択肢」であることです。つまり、保護者もおらず自身の世話をしてくれる身寄りがいない子どもとなります。というのも、子どもにとって最善であるのは施設での生活ではなく、家族と一緒に暮らすことだと思うからです。

村田さん：家族が見つかるのであれば、家族とともに暮らす方が望ましいということですね。以前、フィリピン駐在員の方の帰国報告会で、親族探しについて話を聞いた記憶があります。具体的には、どのように行っているのでしょうか？

福田：テレビ、新聞、ラジオを通して親族探しをします。以前、子どもの家の子どもの親族を探すために、新聞に子どもの写真と名前を載せましたが、特に反応はありませんでした。他には、子どもが保護された場所の村役員や地域住民への聞き取りを通して、親族探しを実施したこともあります。路上の子どもの多くは出生登録がなされていないので、常に困難が付きまといまいます。

村田さん：なるほど、大変ですね。子ども家の子どもたちは、普段どのような生活を送っているのでしょうか？

福田：平日は公立の学校に通っており、帰宅後は、宿題、掃除洗濯、夕食の準備お手伝いをするとともに、テレビを観るなど自由に過ごす時間もあります。週末は、通常の日課に加え、施設の菜園の手入れやバスケットボール等のスポーツをしたりして過ごしています。また、社会福祉士による「リーダーシップ研修」や「道徳教育」も実施しています。

村田さん：子どもたちは、学校の友達以外の人との接点はあるのでしょうか？

福田：子どもの家にはスタディツアー等で日本からの訪問者が来ますので、そこで他の人と関わる機会もあります。

村田さん：日本人と交流する場もあるんですね。そういえば、このようなスタディツアーの参加費も、子どもの家の運営費に活用されているのでしょうか。

福田：はい。子どもの食費や通学費、寮父母の給料等で運営費は年間400万円ほどかかるのですが、スタディツアーの参

加費以外では、日本の皆さまからの会費やご寄付、街頭募金、語学教室からの資金で成り立っています。今後、子どもを増やしていくためには、より多くのご寄付が必要になってきます。



村田さん：そんなにかかるんですね。福田さんは、子どもたちに将来どのように育ってほしいと思いますか？

福田：彼らの中には、親から見捨てられた子どもや親の愛情を受けることができなかった子どももいますので、将来自分自身が親になった時には、自分が受けたような辛い思いを子どもにはさせず、しっかりと愛情を注ぎ、責任ある親になってほしいと思っています。また、できれば、安定した収入を得ることができる職に就いてほしいと思っています。

村田さん：最後に、子どもたちにとって、今一番必要なものを教えてください。

福田：何が一番必要かを述べるのは難しいですが、1つあげると、自己肯定感だと思います。親や周囲の大人から、「お前は夢を持ったって無駄」と言われ、路上で生活しているだけで偏見を持たれる等の辛い経験をしてきたため、自身で自分の価値を感じるのが難しい傾向にあるようです。ですので、あなたたちはかけがえのない存在で、自身の生活をよりよくできる存在であり、社会もよりよくできる存在であるということを、実感してもらいたいですね。

ボランティア

村田 結子さん



特集2：マルカジ難民キャンプで「子どもの保護」を推進するジブチ事務所橋本

2019年1月、イエメン難民が生活するジブチ北部のマルカジ難民キャンプ内に「子どもの保護センター」が完成しました。事務局ボランティアを続けてくださっている畑忠嗣さんが、同センターについてジブチ事務所の橋本美和にインタビューをしました。



アイキャン
ジブチ事務所
駐在員
橋本 美和

畑さん：早速ですが、橋本さんは、難民キャンプの中で生活されているわけではないのですよね。

橋本：いえ、私は普段首都のジブチ市にあるジブチ事務所で働いています。マルカジ難民キャンプには他の職員が常駐し、私は月に数回出張し、事業の管理を行っています。

畑さん：ジブチ事務所から、北部のマルカジ難民キャンプまではどのくらいかかるのでしょうか。

橋本：フェリーで約2時間、車で約4時間かかります。フェリーであれば車の半分の時間で到着できますが、週に2回しか出航していないため、曜日を選ぶ必要があります。また、券売所は混沌としていて、チケットを買うだけでもかなりの体力と根気が必要です。

畑さん：陸路でも海路でも大変なんですね。難民キャンプに住む難民の方々は、どこから来ているのでしょうか？

橋本：約2,200~2,300人の人口のほぼ全員がイエメンから来ています。また、全人口のうち約半数は、0~17歳までの子どもであるという統計が出ています。



畑さん：キャンプ内に子どもの保護センターが完成したと伺いました。

橋本：はい、こんなにも子どもの数が多いにもかかわらず、子どもの保護センタ

ーができるまでは、子どもたちや子どもに関する悩みを抱えた保護者が、プライバシーを確保された環境でカウンセリングの専門家に相談できる施設というものは存在しませんでした。紛争により、数々の暴力的な状況から逃れてきた子どもたちにとって、まずは心のケアができる環境整備が必須だと考えました。

畑さん：なるほど。子どもの保護センターは保護といっても、養護施設ではなく、児童相談所のような機能を持っているわけですね。カウンセリングでは、どのような内容の相談を受けることが多いのでしょうか。

橋本：子ども及び女性への家庭内暴力についての相談は多いですね。母親が留守の間に子どもが父親から虐待を受けているケースや、母親が父親から殴られている現場を毎日のように目撃しているケースなど、健やかな心の発育の妨げになるような問題が浮き彫りになってきました。また、見知らぬ人からの性暴力被害に遭ったある少年は、両親に打ち明けることもできず、両親には内緒で相談に訪れました。また保護者からは、子どもの攻撃的な態度や、学校に行きたがらない子どもに関する相談などに加え、精神的疲労感を訴える声も多くあがっています。

畑さん：どちらかという、母親からの相談が多いんですね。カウンセラーの方は、アラビア語が話せる日本人なのでしょうか。

橋本：そこが難しいところなのですが、まず小国ジブチにはカウンセラーと呼ばれる人材はほとんど存在しません。また、アラビア語の中でもイエメンのアラビア語を話すカウンセラーを探すことは難しく、現在、カウンセラー資格を持つアイキャンのケニア人女性スタッフが、英語を話せるイエメン人スタッフとともに、カウンセリングを行っています。

畑さん：ケニア人を雇用しているんですね。彼女がカウンセリングを行う上で難しいと感じていることなど、もし聞いていたら、教えてもらえますでしょうか？

橋本：はい、彼女からは日々報告を受けているので、子どもの保護センターが完成した今でも、適切なフォローアップを

継続していくことの難しさについて聞いています。例えば、文字が読めないために自分より年下の生徒に馬鹿にされることを恐れ、学校に行きたくないと言っていた13歳の少年は、母親に連れられてカウンセリングに訪れ、復学に興味を示していたものの、約束していた次のカウンセリングには姿を現しませんでした。また、せっかく勇気を振り絞って相談に来て、イエメンに残してきた親族と合流するためにイエメンに帰ってしまい、次のカウンセリングに来られなかったというケースもあります。あるいは、家族に内緒で相談に訪れた場合、発覚を恐れてカウンセリングを継続できないということもあります。

畑さん：建物が完成した今、今後はカウンセリングを継続することの重要性を理解してもらえるように努力する必要がありますということなんですね。



ボランティア
畑 忠嗣さん

橋本：そうですね。子どもにとって、個室で大人と話をするというのは非常にハードルが高いものだと思いますので、まずはアイキャンが運営する「子どもの広場」活動に参加してもらえるよう、働きかけをしています。そうすることで、閉ざされていた心が少しずつでも外部に対して開かれていくと思っています。

畑さん：子どもたちに対する想いも聞かせてもらえますでしょうか。

橋本：子どもは日に日に成長し、大人への階段を駆け足で登っていきます。私たちはその子どもたちに歩幅を合わせ、笑顔の下に隠れた心の闇を明るく灯すための地道な活動を続けています。それが子どもの保護センターの建設であり子どもの広場活動です。子どもたちが将来、夢や希望を胸に勇気をもって社会へ溶け込んでいけるように願っています。

2018年11月～2019年4月のアイキャンの活動

I 危機的状況にある子どもたちとともに行うプログラム

※アイキャンの事業年度は毎年5月1日に始まります。

1. フィリピン (アジア)

<首都マニラ近郊>

ドロップインセンターを週4回開所し、路上の子どもたちに勉強、食事等の機会を提供しました。施設外では自治体役員5名に対して子どもの保護に関する研修を行うとともに、同役員及び警察と協働で夜間の見回りを実施しました。



元路上の子どもたちによって運営されるカリエカフェは2018年11月に「勉強カフェ」としてリニューアルオープンし、経営や接客に関する研修を15回実施（延べ82名）し、児童養護施設「子どもの家」では4月までに、施設の2階部分が完成しました。

ごみ処分場周辺地域では、フェアトレード商品生産団体SPNP8名と新商品やマーケティング等のミーティングを10回、協同組合PICOのメンバー3名が行う診療活動のモニタリングを6回行い、経営や広報に関する助言をしました。



<ミンダナオ島>

ミンダナオ島中西部の治安が不安定なコタバトでは、子どもの権利・保護に関する村の調査会議をピキット町42村及びマタノグ町8村で計100回実施し、延べ1,834名が参加しました。また、上記調査結果を2町の町役場職員計17名とユニセフ職員4名に発表し、対策について話し合いました。



中東部の先住民の子どもたちが多く住むブキドノン州では、水道が設置され、748名がきれいな水にアクセスできるようになりました。また、同地域の村において、水道管理研修を2回実施し、55名の住民組織メンバーが参加しました。保護者及び住民組織を対象にした保健研修は2回実施され、62名が参加し、疾病予防に関する衛生研修は2回実施、59名が参加しました。



2. ジブチ (アフリカ)

ジブチ国内3つの全難民キャンプにおいて、子どもたちの状況を把握し、対応策を分析するために家庭訪問を週平均75件、最善利益評価(BIA)を週平均1件実施するとともに、25名の子ども及び保護者に対してカウンセリングを行いました。



また、難民キャンプ内の青少年によって運営される「子どもの広場」を335回実施し、延べ9,814名が参加しました。青少年を対象にした研修は10回実施され、75名（延べ207名）が子どもの権利・保護などに関する知識を身に着けました。保護者対象の子どもの権利・保護研修では、通常のレクチャー形式を6回、劇やダンスも取り入れた形式を2回実施し、それぞれ240名（延べ240名）、385名（延べ385名）が参加しました。子どもが中心となって司会進行を行う子ども議会を9回実施し、167名（延べ271名）が教育問題などをテーマに議論をしました。難民キャンプ及び受け入れ地域の子どもの相互理解を目的とし

てサッカー大会を3回実施するとともに、難民コミュニティからの要望・提案を受け付けるためにレセプションデスクを開設しました。

イエメン難民のキャンプでは、個室でのカウンセリングや研修を実施する場である「子どもの保護センター」の建設が完了し、保護者による集会などに使用できる「多目的センター」の建設を開始しました。また、「子どもの広場」活動に参加する子どもを対象にライフスキル向上研修を5回実施し、52名が参加しました。そして、難民で構成される「性と性差に基づく暴力(SGBV)防止委員会及び保健推進員23名に対して(SGBV)防止委員研修を実施しました。



受け入れコミュニティでの活動として、オボック市及びアリサビエ市にて政府関係者を対象に子どもの権利・心理に関する研修を実施し、44名が参加しました。また、アリサビエ市内の病院におもちゃ22点と子ども用の本26冊を提供しました。

3. イエメン (中東)

戦闘が激化していた港湾都市であるホデイダ州では2018年12月に和平交渉が開かれ、停戦合意がなされましたが、大きな進展は見られず、ますます飢餓が拡大している状況です。2018年11月にはホデイダ州で600世帯への食糧提供を行いました。



4. ソマリランド (アフリカ)

ソマリア北部に位置するソマリランドの首都ハルゲイサ市近郊にあるガラビス、ジャバークの2村において、干ばつによる水不足の影響を軽減するため貯水池の建設を開始しました。

5. 日本

日本国内の社会課題を解決すべく、中部・関西でニーズ調査を実施しました。

II 「できること (ICAN)」を増やすプログラム

1. 能力強化事業

教育機関及び企業等にて、計3回(96名)講演を行いました。教育機関では路上の子どもたち、企業主催イベントでは協同組合設立事業(PICOやカリエカフェ)、そして映画館ではイエメンの紛争をテーマに取り上げました。また、フィリピン駐在員による帰国報告会には、20名が参加しました。



NGO 相談員業務として、NGOの活動やボランティア等に関する相談を703件受け付け、東京、岐阜、愛知、富山、大阪、静岡、三重での講演や相談出張を計8回実施しました。



フィリピンの事業地を訪問するスタディツアーを2回開催し、10名が参加しました。高校研修も実施し、23名がフィリピンの人々と相互理解を深めました。



フィリピンで5名、日本事務局で1名のインターンを受け入れ、フィリピンではフェアトレード及び路上の子どもたちの事業補佐に、日本では街頭募金や事務作業補佐に携わりました。

チャリティ語学教室では、英語129回とタガログ語41回の授業を行い、22名の生徒が語学力向上に励みました。クリスマスの交流イベントには23名が参加しました。



2. ボランティア・寄付活動推進事業

フィリピン路上の子どもたちのための街頭募金活動を計6回実施し、内5回は集まった金額と同額を賛同企業がご寄付してくださいました。ボランティア延べ116名が参加し、延べ757名が募金してくださいました。



ハガキ(計33,417枚)や古本等の収集活動を行い、延べ223名が事務局ボランティアを行ってくださいました。

今期、マンスリーパートナーは22名増えました。

マニラの「スポーツフェスタ」、日本のワン・ワールド・フェスティバル等計4つのイベントに出店し、インターンとボランティア延べ13名がフェアトレード商品の販売をおこない、販売を通してフェアトレードの意義や価値を一般市民に伝えました。



3. 政策提言事業

NGOと外務省の連携を推進するNGO外務省連携推進委員会に関する会議に11回、NGOとJICAの連携を強化するNGOJICA協議会の会議に4回参加しました。



メディア掲載(9件)

- 2018.12.24 中日新聞 SDGs ユースアクションプランの実施
- 2019.1.8 電気新聞 民間企業との協働での環境教育教材作成
- 2019.1.19 中日新聞 「子どもの家」の紹介及び増築費用のハガキでの寄付呼びかけ
- 2019.1.22 中京テレビ 書き損じハガキ収集活動
- 2019.3.20 朝日新聞 名古屋開催のイスラーム映画祭、他

～アイキャンスタッフより<日本事務局 西坂 幸>～



学生の頃、講演で初めて聞いた世界の現状に強い衝撃を受けた事を今でも覚えています。そのたった1回の講演が「人生の分岐点」となり、今アイキャンで働いているといっても過言ではありません。今は、私自身が講演をさせて頂く立場として、少しでも多くの方が社会問題に関心を持ち、できる事を実践する人を増やせるよう、常に意識しています。かつて私がそうであったように、私との出会いが「人生の分岐点」になるかもしれない、そう思うと身が引き締まります。

アイキャンで働いていると、とても多くの方が社会問題や地球規模の問題に関心を持ち、ボランティアをされたり、講演を依頼したりして下さるのだと実感し、とても励みになっています。

日々の業務は多岐に渡り、地道な作業も多く、また解決しようとしている課題が大きいため直接的な成果を見るまでには、長い時間がかかります。しかしその中で、それぞれが、それぞれの「できること(アイキャン)」を考えて実践されている姿を見る時、どう実践すれば良いのか相談して下さる時、未来への希望が見える気がします。一人のちからで世界を変える事はできませんが、こうした一人一人の力が社会を変える大きな力になるのだと、アイキャンに入って私自身も学びました。

2018年11月「生まれ変わったカリエカフェ」

<フィリピン事業 (マニラ・路上) >



ICAN マニラ事務所
飯塚 愛理
～プロフィール～
大学卒業後、民間企業
の法人営業を経て、国
際政治・平和構築での
修士課程を取得。2018
年2月より現職。

元路上の子どもたちによってマニラ首都圏ケソン市の国立フィリピン大学内で運営されていたカリエカフェが、『勉強カフェ』としてリニューアルオープンいたしました。カリエカフェは以前、パンや焼き菓子、パスタを提供するカフェとして営業をしていましたが、なかなか黒字にすることができず、経営モデルを再考することになりました。特に、パン作りはカリエカフェにとってシンボリック的存在でもありましたが、まずは黒字経営を目指すことを目標にし、新しいカフェではパン作りを一旦断念することになりました。

今回のリニューアルオープンに向けて力を入れたのは、フィリピン大学内のニーズを把握するための市場調査でした。学生たちはどんなことをカフェに求めているのか、それをいかにビジネスにつなげるかがポイントでした。学生への市場調査では、「普通のカフェはうるさくて勉強に集中できない。」「大学内には快適に勉強する場所がほとんどない。図書館は冷房がなくて暑いし、喫茶店は寒すぎる。」等の声があり、勉強カフェへの確かなニーズを確認できました。また、カリエメンバーの経営意識や接客を強化するため、アイキャンのパートナー団体である協同組合 PICO から3名が、カリエカフェの運営に参加することになりました。PICO は、パヤタスごみ処分場周辺に住むお母さんたちが医療活動を行う住民組織で、経営や接客において高い能力と経験を持っているため、一緒に運営をすることで、毎日彼女たちの姿勢や作業から学ぶことができると考えたからです。

再オープン前後は怒涛のような日々でした。内装の整備に加え、勉強カフェとしてのビジネスを学ぶための他のカフェへの視察研修を行うと同時に、カフェの存在を広報するためのビラ作りを行い、オープンから12日間で約4,050枚のビラを大学内の学生へ配りました。また、授業の中でカフェについて説明をしたり、ビジネス学部の学生からインタビューを受けたりする等、大学側の協力も得ることができました。

しかし、黒字経営にするためには、まだ十分な利益が出ていないのが現状です。お客様からは、「内装が素敵で居心地よく勉強に集中する事ができた。」「店内の音楽のセンスが良い。」等の嬉しいお言葉を頂く一方で、「もっと遅い時間まで営業してほしい。」「Wi-Fiを設置してほしい。」「以前のようにパンやパスタを売ってほしい。」等の有難いご意見も頂いています。今後は更に多くのクラスでのカリエの説明や大学公式のホームページに掲載してもらう等、広報活動を強化すると共に、こうしたお客様の声を少しでも反映できるよう、常にビジネスを改善していく予定です。

ある日のスケジュール

- 09:30 メールチェック
- 10:00 全体会議
- 11:00 予算申請確認
- 13:00 事業別会議
- 15:00 路上事業関連の報告書作成
- 16:00 カリエカフェ訪問
広報、売上分析
- 17:00 カリエカフェ事業計画の考案
- 18:30 帰宅



ジブチ事業

11月12・19日 / ホルホル・アリアデ(ジブチ)

子どもの権利と保護に関する啓発キャンペーンを実施



難民コミュニティに対し、啓発キャンペーンを実施し、ホルホルでは200名、アリアデでは185名が参加しました。イベントでは、アイキャンの活動説明や、子どもの権利と保護に関する子どもたちによる歌・劇・ダンス

の発表が行われました。発表を見た男性からは、「男の子も女の子も同じように教育が大切だと分かった。」との声が聞かれました。

NGO 相談員

11月10・11日 / 富山・愛知

NGO 就職相談等を行いました



10日、11日「ワールド・コラボ・フェスタ2018」に、11日「国際交流フェスティバル in 富山」に、NGO 相談員として出展をしました。NGO や国際協力に関する質問対応に加え、NGO での就職やボランティア等を希望する

方への相談対応をしました。ブースに来られた女性からは、「将来 NGO への就職を検討している中、今後自分が何をすべきか考えるきっかけになった。」とのコメントをいただきました。

フィリピン事業 (マニラ・ごみ処分場) 11月8日 / パヤタス(フィリピン)

商品のコスト見直しを実施



フェアトレード生産者団体 (SPNP) は、既存の商品のコストについて話し合いを行いました。材料費が値上げする中、極端に商品の価格を上げずに販売できる方法はないか、材料費以外で節約できる費用はないか、等のアイデアを出し合いました。

メンバーの女性は、「商品の価格が上がりすぎると、購入されにくくなってしまいます。SPNP みんなで協力してコストを見直していく必要がある。」と話しました。

講演・イベント・訪問受け入れ

11月10日 / 愛知

中学生12名へ講演を実施しました



名古屋女子大学中学校の生徒12名に対し、フィリピンの路上の子どもたちやイエメンの食糧不足の現状について講演を行いました。中学生でも身近にできることについて考え、意見を出し合った後、ボランティア作業を行っていただきました。また、今後できることとして街頭募金活動を紹介したところ、「学生でも街頭募金に参加できると知ったので、今度参加したい。」と話してくれました。

2018年12月「子どもたちの自信につながる『子ども議会』」

<ジブチ事業>



ICAN ジブチ事務所
川口 彩子

～プロフィール～
大学院で国際関係論を専攻後、アフリカに渡り、政府開発援助機関に従事。2018年8月より現職。

ある日のスケジュール

08:00 メール及びスケジュール確認
09:00 週例会議
10:00 予算申請書作成
13:00 事業計画作成
14:00 フィールドスタッフとの打ち合わせ
15:00 研修報告作成
写真整理
16:30 出張予定確認
17:00 帰宅

アリアデ難民キャンプ（主にソマリア難民が居住）と、ホルホル難民キャンプ（主にエチオピア難民が居住）において、「子ども議会」を開催しました。「子ども議会」とは、子どもたちが模擬議会を実施し、自分たちに関係のある議題について意見を交わすと同時に、意思決定プロセスを理解することで、ライフスキルの向上を目指したものです。これまでキャンプの子どもたちは、自分の意見を言ったり、何かを決めたりする機会は殆どありませんでした。そのため、キャンプでは初の試みとなり、11月に実施された「第1回子ども議会」では子どもはもちろん大人にも意義や目的について十分理解してもらい、その上で、子どもたちが自分たちの代表を選出するところから始めました。

第1回では決められた議題について話しましたが、第2回となる今回は、子どもたち自身が議題を決め、キャンプの課題について意見を出し、その解決方法について話し合いました。「薪集めに時間がかかり学校に行けないため、ガスが必要だと思う」「学校へ行くよりも家で働いてほしいと思う保護者もいるため、子どもの権利について親に啓発活動をする必要がある」といった意見もあり、手探りながらも、子どもたち中心となった議会を実施することができました。特に一番関心が高かったのは教育で、「もっと色々な教科を教えて欲しい」「図書館が欲しい」等の、学校や教育省に対して要請を出すといった内容でしたが、中には、「高学年の子どもが低学年の子供に勉強を教える時間を放課後に設ける」や「朝早く学校に行き、グループ学習を実施する」等、

自分たちが率先してできるような案も出されました。振り返りの時間には、「今まで人前で話したことがなかったけれど、色々な議題について話せて楽しかった」「次は、キャンプにいる障がい者や高齢者の人々をどうやって助けられるかみんなで話したい」「キャンプで開催される大人の居住区会議にも子ども代表として参加したい」など積極的な意見が多く出ました。特に議長を務めた子どもの成長は目を瞠るほどで、後日キャンプを訪れた際も誇らしげに自分の役割について話してくれました。



今後も、より多くの子どもたちが、同じように自信を持てるよう、新しい子どもたちを対象とした「子ども議会」も継続して実施していく予定です。また、これまで参加してくれた学校の先生やコミュニティリーダーにもより多くの参加を求め、子どもたちの声が大人に届き、子どもの権利についての理解が促進されるよう、アイキャンとして活動していきます。

今後、より多くの子どもたちが、同じように自信を持てるよう、新しい子どもたちを対象とした「子ども議会」も継続して実施していく予定です。また、これまで参加してくれた学校の先生やコミュニティリーダーにもより多くの参加を求め、子どもたちの声が大人に届き、子どもの権利についての理解が促進されるよう、アイキャンとして活動していきます。

フィリピン事業（マニラ・路上） 12月7日／マニラ（フィリピン）

児童養護施設「子どもの家」の2階部分建設が開始



12月7日から「子どもの家」敷地内での作業が始まりました。「子どもの家」に住むエイドリアン君（10歳）は、「建設が行われている間は学校へ行っているため、日常生活への支障はありません。安全上、建設現場へ近づくことが出来ませんが、2階が出来るのをとても楽しみにしています。もっと多くの仲間が増えるといいな、と思います。」と期待に胸をふくらませました。

建設現場へ近づくことが出来ませんが、2階が出来るのをとても楽しみにしています。もっと多くの仲間が増えるといいな、と思います。」と期待に胸をふくらませました。

街頭募金

12月15日／愛知

街頭募金ボランティア、7名が初参加



フィリピンの路上の子どもたちを応援する街頭募金に15名（うち7名は初参加）のボランティアの方々にご協力いただきました。初参加の高校生は「自分の思いや声を届けること・人の心を動かすことの難しさを感じた。でも1番感じたのは人の暖かさだった。『寒い中お疲れ様』『頑張ってるね』等の暖かいお言葉を通行人の方がかけて下さったことが嬉しかった。」と感想を話してくれました。

でも1番感じたのは人の暖かさだった。『寒い中お疲れ様』『頑張ってるね』等の暖かいお言葉を通行人の方がかけて下さったことが嬉しかった。」と感想を話してくれました。

フィリピン事業（ミンダナオ島事業）12月17日／コタバト（フィリピン）

ユニセフ事業が始まります



ユニセフ助成による地域の関係者との対話を通じた平和構築事業が開始しました。新規事業のオリエンテーションにアイキャン職員3名が参加し、事業実施のスケジュールや地域への調査内容について話し合いました。リーダーのジェスは、「真の

平和とは、地域レベルで発生する家族間の争いの平和的解決が定着することだと感じる。本事業を通して、地域レベルの平和を確立していきたい。」と意気込みを語りました。

NGO 相談員

12月24日／大阪

ワン・ワールド・フェスティバル for Youth に参加



大阪で開催されたワン・ワールド・フェスティバル for Youth に NGO 相談員として参加しました。ボランティア活動、NGO への就職、留学に関する質問をいただき、大学生の男性からは「NGO と外務省の違いや両者の繋がりについてよくわかった。

また、NGO を目指すために大学のうちに取り組むべきことを聞けたため、1年、2年先のタイムラインを意識できるようになった。」との声をいただきました。

2019年1月「ともに力を合わせて活動する『仲間』」

<街頭募金>



ICAN 日本事務局
宮澤 卓海
～プロフィール～
大学卒業後、2018年
3月よりインターン

私は2018年3月から1年間日本事務局のインターンとして活動してきました。インターン開始直後にアイキャンのフィリピンスタディーツアーに参加した際、路上で生活をしている子どもたちの生活状況を目にし、滞在中に路上の子どもたちに物乞いをされたことに衝撃を受けました。帰国後は、フィリピンで自分が経験したことを、少しでも多くの方に共有したいと思い、「フィリピンの路上の子どもたち」と「紛争地イエメンの子どもたち」を応援する街頭募金を担当しました。この街頭募金は、10年以上毎月名古屋の街中でボランティアの皆さんと行っているもので、最近では、アイキャンの活動理念に賛同して下さっている企業様から、企業協賛として、街頭募金で頂いたご寄付と同額のご寄付を毎月お預かりしています。

私が街頭募金の担当となり最初の約半年間は、ボランティアの数があまり増えず、ボランティアの継続率も低く、そして募金額も低調な日々が続きました。しかしある日、人数が少なくても、ボランティアの皆さんが生き活きと活動してくださった時には、関心を持って足を止めてくださる歩行者の方が増えたり、募金額が人数に対して多く集まることに気が付きました。逆に、ボランティアの皆さんの人数が多くても、一体感があまりない日には、自然と募金額も低い傾向がありました。このころから、参加者が協力して、十分な力を発揮することが、関心を持ってくださる方を増やし、結果的に子どもたちのためになるということが分かりました。

そこで、街頭募金を行う上で、とにかく「ボランティアの皆さんに満足頂くこと」を第一に、街頭募金の募集案内の修正や活動時の雰囲気作り、初めて会うボランティア同士が馴染みやすい環境作り等に取り組みました。改革を始めてから、少しずつですが、友人を誘って一緒に活動に参加して下さる方や継続して活動に参加して下さる方が増え、また、初対面のボランティア同士が、その日の活動を終える頃には意気投合する様子が見られるようになり、改革の成果が表れてきました。その結果、街頭募金でお預かりする金額も増えていきました。



この1年間、様々な経験をしてきました。その中でも最も強く感じたことは、「人が持つ力」です。背景の異なる多くの人々が協力し、助け合った時の力の大きさを改めて実感させられました。インターンとしての活動は2月で任期満了となりますが、アイキャンの街頭募金活動を通して感じたこの思いを胸に、行動をし続けていきます。

ある日のスケジュール

- 11:00 メールチェック
- 12:00 日本事務局でのミーティング
- 14:00 街頭募金報告書作成
- 16:00 次回の街頭募金の資料作成
- 17:00 メール送信
- 18:30 チャリティ語学教室に参加
- 20:00 帰宅

フィリピン事業（ミンダナオ島事業）1月19日／ブキドノン（フィリピン）

先住民地域にて「水道システムの維持管理研修」を開催



綺麗な水を利用できないことや、地域住民の衛生概念が不十分なことが原因で、子どもたちが下痢や赤痢等に悩まされているミンダナオ島の先住民地域において、水源を綺麗に保ち、水道システムを維持管理していくため

の組織を結成し、研修を実施しました。研修に参加した地域リーダーは、「研修で学んだ、水を清潔に保つことの啓発を地域でも行っていきたい。」と話しました。

講演・イベント・訪問受け入れ

1月30日／愛知

フィリピンの路上の子どもたちについて考える講演



愛知県の相山女学園高等学校の2年生40名を対象に講演を行いました。自分がNGO職員であれば、どのような継続的な活動を行うかについてグループごとに話し合い、最後に提案してもらいました。生徒からは、「根本的な解決につながる活動をしなけばいけないと学んだ。」や、「医療活動や教育を通して、すべての人が安全な生活が送れるようにしたい。」等の意見が出ました。

ジブチ事業

1月／オボック（ジブチ）

「子どもの保護センター」完成



ジブチ北部にあるイエメン難民キャンプにおいて、「子どもの保護センター」が完成しました。センターは、難民の子どもへのカウンセリングや研修等を実施する場所として活用され、既存の「子どもの広場」とともに、キャンプ内の子ども

を保護する拠点として機能していきます。活動を連携する国際機関のスタッフからは、「今後カウンセリングを行う際に、プライバシーを確保できるのがありがたい。」との声が聞かれました。

ボランティア活動推進事業

1月26日／愛知

企業との協働で紙芝居を作成



中部電力グループのボランティア7名が、アイキャンを通じてフィリピンの路上の子どもたちに贈る環境教材とビデオレターを作りました。文字が苦手な子どもたちにも楽しんでもらえるように、カラフルな紙芝居に仕上げ、世界の環境問題やSDGs（世界共通の目標）を伝えるオリジナルの紙芝居が完成しました。参加者からは「この活動を通して世界の課題を自分ごととして考える機会になりました。」との感想を頂きました。

2019年2月「NGOは、『人に感謝を感じる仕事』」

<NGO 相談員事業>



ICAN 日本事務局
吉田 文
～プロフィール～
中京大学を卒業後、
留学会社営業職を経て、
2009年7月より
現職

2月は「NGO 相談員」として、大阪と浜松の国際協力イベントで出張相談を行いました。各地へ相談対応に行くと、多くの人が「NGO で働きたい・NGO を設立したい」と思っていることに驚きます。「人に感謝される仕事をしたい」「利益を追求するのではなく、社会貢献がしたい」「待遇ではなく、心が満たされる仕事を選びたい」「国際問題の解決というやりがいのある仕事に携わりたい」など、様々な動機を持った多くの方が、世界を良くしたいと相談に来てくれます。

しかし、これらのイメージは、実際に働いている私たちの感覚とは、やや異なります。私たちの活動は賛同して下さる方々のご寄付やボランティアで成り立っており、また事業地でも多くの方の協力なしに活動は成り立ちません。そのため、NGO は、「人から感謝される仕事」というより「人に感謝を感じる仕事」と言えます。収入がなければ、活動も続けられず、子どもたちの生死、そして将来に関わります。少しでも収入を増やし、経費を削減することを常に考える、そのプレッシャーは、正直企業で働いていたときよりも遥かに大きいです。待遇についても、もちろん高待遇にする必要はありませんが、非営利組織でも、職員の待遇を改善させなければ、一人ひとりの生活が成り立たず、活動も継続できません。メディアで表現されがちな「やりがいのある国際協力」とは異なり、実際の業務は、たまにやりがいさえも見失ってしまう程の数え切れない地道な業務の積み重ねでもあります。社会の不平等や暴力、理不尽さを目のあたりにし、怒りや憤り、悲しみで心が疲弊することさえあります。

そのような現実がありながらも、「是非 NGO で働いてください！」と叫びたくなるのも事実です。信頼できる仲間や現地の人々に支えられながら活動して、家族と同じように大切に思える人が世界に増えてい

きます。仲間とともに、本気で泣いたり怒ったり笑ったりしながら、私の目標は私だけの目標ではないことに気が付きます。山のような憤りの中で見つける小さな喜びは、何ものにも代え難い、私自身が生きる希望となっています。これほど心が動く仕事は他にないと胸を張って言うことができます。

「仕事を決める」のは、「生き方を決める」ことと同じだと私は思います。理想と現実が乖離することなく「生き方」を正しく選ぶためにも、ぜひ私たち「NGO 相談員」の実際の経験や情報を活用してください。

ある日のスケジュール

- 11:00 メールチェック
- 12:00 日本事務局会議
- 14:00 来客・問い合わせ対応
- 15:00 講演資料作成
- 16:30 事業別会議
- 17:30 フィリピンからの
支出申請処理
- 18:30 チャリティ語学
教室対応
- 20:00 帰宅



ジブチ事業

2月1・2・8日/タジュラ(ジブチ)

イエメン難民の子どもたちへの課外研修を実施



イエメン難民キャンプから車で1時間程の町、タジュラにおいて、9歳～12歳の子どもを対象とした課外研修を実施しました。自己認識能力や感情対処能力を向上するための研修を行った後、チームに分かれて地図に載っ

ている建物を探す活動を行いました。子どもたちは、「いつもと違う場所での活動は新鮮だった。」と話し、1ヶ月後に行った活動評価でも、能力が向上していることが分かりました。

街頭募金

2月16日/愛知

街頭募金ボランティアへ25名が参加



フィリピンの路上の子どもたちを応援する街頭募金活動を行いました。ボランティア25名のうち、8人は初参加、10名は前月からの継続参加でした。今回が2回目となった参加者は、「前は初参加で、思うように自分の

想いや言葉で人を動かすことが出来ず悔しい思いをした。今回は積極的に自分の思いを発信でき、自分の声に反応して募金をしてくれた方がいた。」と喜びを語りました。

フィリピン事業(ミンダナオ島事業)

2月/コタバト(フィリピン)

子どもの権利保護に関する地域住民との対話



2月11日～28日にかけて、マギンダナオ州マタノグ町の8村及びピキット町の16村において、子どもの権利保護に関する地域住民との対話が合計24回実施され、村役員・地域保健士・宗教リーダー等298名が参加しました。村役員のハシムさん

は「今回の対話から、子どもたちの置かれている状況を知ることができた。子どもの権利を守るために地域の関係者が協働する必要があると感じた。」と感想を述べました。

チャリティ語学教室事業

2月/愛知

平日の昼間に英語授業を開講



英語やタガログ語の授業料の一部がフィリピンやイエメンの子どもたちの活動に使われる「スマイル・チケット」。これまで夜間に行われていましたが、2月から昼間のクラスもスタートしました。受講する女性からは、「平日の夜や土曜

は家事もあり、通えなかった。チケットにはレッスン代でフィリピンの為にできる事が英語とタガログ語で書かれており、とても良い取り組みだと思う。」との声をいただきました。

2019年3月「子どもの教育と命を守る」

<フィリピン・ミンダナオ島事業>



ICAN マニラ事務所
福田浩之
～プロフィール～
フィリピン大学修士課程、ICAN マニラ事務所インターンを経て、2013年4月に入職。社会福祉士。

フィリピンには、1,400万～1,700万人の先住民が住んでおり、その内61%は南部のミンダナオ島に集中しています。先住民が住む村では、教育インフラの未整備や収入の欠如、出生登録の不備、治安等の問題から、学校教育を受けられない子どもたちが多数存在しており、アイキャンは、同島で、1996年より先住民の子どもたちへの学校給食や菜園活動、学校建設、奨学金・学用品の提供、先住民専用の教育カリキュラムの作成、地域の保健ボランティアの育成、衛生環境の改善啓発、親への生計向上活動、伝統文化振興等を実施してきました。そして、この3月は、同島中部に位置するブキドノン州の村で、水道整備の活動を実施し、約750名の住民が綺麗な水を利用できるようになりました。

当初、この村では、保健や衛生の概念が人々に浸透しておらず、生活排水が垂れ流され、水質汚染が深刻でした。多数の住民が赤痢等の感染症にかかり、中には、死亡してしまう子どももいました。また、足の痒みや不調を訴え、学校を早退・欠席する子どもも多くいて、学校生活に支障が出ていました。住民の間では、これらの課題を何とかしたいという思いがあり、汚染水が原因だということが分かっているにもかかわらず、どうすればよいか、具体的な解決策が見出せずにいました。

そこでアイキャンは、まず、汚染水の原因について、住民と話し合いの場を設けることにしました。「細菌」や「感染」という概念を図で説明しながら、赤痢や皮膚炎の原因を学び、最終的に住民は、自分たちの使用している水を綺麗にしなければ、病気も無くならないし、子どもたちの教育環境も向上しない、という結論に至りました。そこでアイキャンと住民は、山奥の綺麗な水源を探し出し、そこからホースを引き、水道設備を建設するとともに、水道利用の規則の設定や維持管理方法の研修、基礎的な疾病の対処法や手洗いうがいの重要性を扱った保健・衛生教育等を実施してきました。



水道維持管理担当の住民は「汚染された水によって子どもたちが病気になっていると知って衝撃的だった。今は、水源を綺麗に保つこと、手洗いうがいを地域の子どものに教えることが、私の役目だと感じている。」と語ってくれました。どの地域でも、「自分たちの状況を変えたい」という意識を駆り立て、状況改善に向けた道筋を見つけるための場を作ることが、アイキャンの役目だと思っています。今後もその役目をしっかりと認識して、先住民地域の人々の生活状況の改善に取り組んでいきます。

ある日のスケジュール

- 08:00 メール確認
- 09:00 現地職員との事業別会議
- 10:00 活動報告書確認
- 11:00 駐在職員との事業別会議
- 13:00 各種マニュアルの改訂
- 14:00 事業報告書作成
- 15:00 会計書類の確認
- 17:00 帰宅

フィリピン事業（ミンダナオ島事業） 3月/コタバト（フィリピン）

子どもが置かれた状況についての発表会を実施



ミンダナオ島マタノグ町及びピキット町の町役場において、ユニセフと協力して、子どもが置かれている教育、保健・衛生、社会サービスに関するデータの発表会を開催しました。マタノグ町役員のマラさんは、

「まだまだ教育を受けることができない子どもたちが多くいることを知り、何とかする必要があったと感じた。町職員と一緒に話し合って現状を改善していきたい。」と話しました。

ボランティア活動推進事業

3月/愛知

フィリピンでの活動を伝える写真展を開催



アイキャンと中部電力グループのボランティアによるフィリピンの子どものための環境教育活動を紹介するため、名古屋市のでんきの科学館にて写真展を行いました。ボランティアの男性は、「写真展を通して、子どもにもこの活動や現地フィリピンの子どもの様子を知ってほしいと思う。」と意気込みを語り、2月27日～3月5日までの7日間に、一般来場者に広く伝えました。

ジブチ事業

3月22・23日/タジュラ（ジブチ）

子どもの権利等に関する研修



イエメン難民キャンプの「子どもの広場」の活動を支える青年ボランティア（アニメーター）に対して、子どもの心理・子どもの権利・リーダーシップの3つのトピックについて研修を行いました。実際のキャンプでの活動経験を基に、活発な議論や質問が交わされました。参加者は、「研修を一緒に受けた仲間との絆も深まったと感じる。リーダーシップについては新しく学ぶことも多く、有益だった。」と感想を述べました。

スタディーツアー・海外研修事業

3月/フィリピン

フィリピンにおいて海外研修とスタディーツアーを実施



長野県上田高校の生徒20名が参加の海外研修と、一般の方々5名が参加のスタディーツアーを、それぞれ実施いたしました。アイキャンの事業地訪問や、現地の人々との交流を重視したプログラムの中で、参加者からは「人の暖かさに触れたり、格差の激しい残酷さにも触れたり、様々な人の価値観に触れた。たった数時間の交流で別れるのが寂しいと思ったのは人生で初めてだった。」等の声をいただきました。

2019年4月「子どもに教育を受ける環境を」

<フィリピン事業（マニラ・路上）>



ICAN マニラ事務所
松本亜祐実
～プロフィール～
立命館アジア太平洋
大学にて開発学を専
攻中。ノルウェーへ
留学後、現在は休学
し2019年3月より
ICAN マニラ事務所
にてインターン

マニラ首都圏北部に位置する墓地に住み、路上で物乞いや仕事をしている33名の子どもたちに対して、今月、路上教育を行いました。活動の中で、環境や衛生に関する紙芝居を行った際、子どもたちは耳を澄ませて話を聞き、質問を投げかけると元気に答える等、積極的に参加してくれていたのが印象的でした。「路上教育（Street Education）」とは、路上の子どもたちに、モラル形成やキャリア教育、そして薬物の危険性や感染症の予防法等の内容を含んだ保健衛生教育を提供するもので、危険と隣り合わせで生きる路上の子どもたちが少しでも安全に暮らすことができるようになることを目指しています。

この路上教育は、アイキャンにとって、とても歴史のある活動です。アイキャンは、2008年から2015年までマニラ首都圏各地の路上において、年200名を超える路上の子どもたちに対して路上教育を行っており、多くの子どもたちが、そこから育っていきました。2016年から2018年は、当時の路上教育活動地の中から、特に路上の子どもたちが多く住むマニラ市の地域に、「ドロップインセンター」と呼ばれる活動拠点をつくり、教育や栄養改善等の活動を集中的に行ってきました。アイキャンは、路上の子どもたちの状況を根本的に改善していくために、現在様々な見直しを行っており、その一環として、マニラ各地に点在し、増え続ける路上の子どもたちに対応すべく、再び路上教育の活動を強化していくことにしました。路上教育に参加する子どもの中で、希望者は、アイキャンの児童養護施設「子どもの家」で生活することもできます。この日活動を行った墓地では、本来居住は禁止されています。しかし、他に住む場所がないために、多くの子どもたちが、ここに住んでいるのが実情です。衛生環境も劣悪で、子どもたちはごみが散乱した地面の上を裸足で走り回り、怪我をすることもあります。犯罪や薬物使用者も多く、子どもたちは危険と隣り合わせの生活を送っています。残念ながら、このような地域は、マニラ各地にあるのです。



子どもたちを取り巻く課題は多く、根深く、解決までの道のりがとても長く感じてしまうのも正直なところ。だからこそ、こうした複雑に絡み合った子どもを取り巻く課題を、そこに暮らす子どもたちとともに、一つ一つ解決していく路上での活動が必要なのだと思います。今後、アイキャンの路上教育は、地域を拡大して実施していきます。子どもたちが少しでも安心した生活が送れるよう、アイキャンの挑戦は続きます。

ある日のスケジュール

- 09:00 子どもの家
訪問報告書作成
- 10:00 フェアトレード商品の
在庫整理
- 11:00 フェアトレードの支出
申請作成
- 13:00 パヤタス訪問
- 14:00 SPNP との会議
- 15:00 パヤタス訪問
報告書作成

フィリピン事業（マニラ・路上） 4月16日／サンマテオ（フィリピン）

子どもの家 2階完成でより多くの子どもも受け入れへ



今月、長年の夢であったアイキャンの児童養護施設「子どもの家」の2階の増築が完了しました。2階にはシャワールームやベッドルームが併設され、この増築により30名以上の身寄りのない子どもたちの受け入れが可能になりました。入所中の子どもたちからは「建物が広がって嬉しい。一緒に住む子どもたちが増えてもっと賑やかな場所になってほしい」等、喜ぶ声を聞くことができました。

ボランティア活動推進事業

4月20日／愛知

チーム力を発揮した募金活動



高校生を中心とする23名のボランティアがマニラの路上の子どもたちを応援する街頭募金に参加しました。「みんなが大きな声で頑張っていたので自分も頑張れた。」「ピラ配りがうまくいかなかった時に、ボランティアの先輩が助けてくれた」等、お互い助け合い、すべてのボランティアが「道行く人へ現状を伝えたい、振り向いてほしい！」という熱い気持ちを持って取り組むことができました。

ジブチ事業

4月18・22・23日／ジブチ

子ども60名が子ども議会に参加



マルガジ、ホルホル、アリアデの3つの難民キャンプで「子ども議会」が開催されました。各20名の子どもが参加し、学校教育において十分な教材がないことや、学校の衛生環境の問題などが課題としてあげられました。子ども議会では身近な議題

について意見を交わす事でライフスキルの向上を目指します。参加者は「学校の課題を考える事で、自分にも良い教育を受ける権利があると知る事ができた」と感想を述べました。

ボランティア活動推進事業

4月23日／愛知

文化祭やイベントに向け、商品入荷



4月23日、マニラから日本事務局へフェアトレード商品が納品されました。ICANの事業地であるマニラのパヤタスゴミ処分場周辺地域のお母さんたちが心を込めて作ったアイキャンのフェアトレード商品は、機械では決して作れない温かみがあります。商品を毎年取り扱って下さっている企業様や教育機関からは、今年もぜひ販売したいとご連絡を頂いており、生産者も多くの方々のお手元に商品が届く事をとても楽しみにしています。

～路上の子どもの活動用ご寄付のお願い～

—より多くのマニラの路上の子どもたちが、危険な路上から出て生活ができるように—



路上での生活



児童養護施設「子どもの家」(現在は1階のみ完成)

寄付の用途：2階部分の増築が終了した児童養護施設を活用し、より多くのマニラの路上の身寄りのない子どもたちが、愛情溢れた環境で生活し、通学することができるように、ぜひ、ご寄付をお願いいたします。

■ご寄付の方法■

1、クレジットカード 今すぐお手続きできます。 <https://kessai.canpan.info/org/ican/>

2、口座引き落とし 会報同封の「振込用紙」または、下記サイト（お電話、メール）でのお申し込みをお願いします。

http://www.ican.or.jp/j/my_ican.html

■寄付の種類■

1、通常のご寄付 ～好きなときにいつでもできる～

「路上の子ども」特別寄付：クレジットカードでは、1口5,000円からのご寄付を受け付けています。

2、マンスリーパートナーになる ～継続的に応援～

毎月1,000円（1日あたり約33円）から任意の定額を寄付して下さる「マンスリーパートナー」を募集しています。パートナーの皆さまの誕生日には、事業地の子どもたちから素敵なプレゼントが届きます。

アイキャンは認定NPO法人のため、寄付者は、税制の優遇を受けることができます。

税額控除の額：その年の認定NPO法人等への寄付合計額（※）×2,000円×40% ※所得税額の40%が上限

詳しくは、国税庁のサイト（<https://www.nta.go.jp/taxes/shiraberu/taxanswer/shotoku/1263.htm>）又はお近くの税務署へ

—マンスリーパートナーさんのご紹介— 半田博子さん 「小さなことの積み重ね」

私は、報道写真誌を通じて、世界の貧困や紛争などを知りました。知れば知るほど、自分の力のなさや現実の厳しさに、何も変わらないんだという無力感でいっぱいになります。でも、地元名古屋で活動しているアイキャンを知り、目に見える関係性の中で、確実に現実を変え、子どもたちの未来を切り開いている地道な活動を知り、あきらめてはいけません！と思いました。ささやかですが、寄付を継続することが、私と世界とが繋がっていると感じられることになっています。小さなことでも、やらない、知らないよりは、ずっといいということ、意識して生活していきたいです。

集めています！～書き損じハガキ・未使用切手・商品券～

未投函の官製ハガキや年賀ハガキ、未使用切手、未使用テレホンカード、商品券を、送ってください。ハガキ1枚が、フィリピンではノート2冊分、又はご飯2杯分の価値のご寄付になります！



認定NPO法人**アイキャン** 平成22年度外務大臣表彰団体

フェイスブックに「いいね！」をお願いします！

アイキャンは1994年より、貧困削減や紛争解決等に取り組む国際NGOです。

住所：〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須3丁目5-4 矢場町パークビル9階

TEL&FAX: 052-253-7299 (火曜～土曜: 12～19時) MAIL: info@ican.or.jp

Website: <http://www.ican.or.jp/> Facebook: <https://www.facebook.com/ICAN.NGO>



印刷通販

印刷 イロドリ SEARCH